

研究ノート

松村みね子翻訳のフィオナ・マクラウド作品を 研究するにあたっての留意点

下 楠 昌 哉

序

19世紀末から20世紀半ばにかけて活躍した片山廣子（旧姓吉田，1878-1957）は、歌人であるだけでなく、菊池寛によって「閩秀文壇唯一の翻訳家」として紹介されるなど、翻訳家としても有名である。特に、「松村みね子」の筆名を主に用いて行ったアイルランド文学の翻訳家としての名声は、同じような活動をした芥川龍之介をはじめとする当時の文人たちのなかで、今も昔もトップの座にあると言っても過言ではないだろう。しかしながら、21世紀の日本においてこの歌人・文筆家・翻訳家を最も巷間に知らしめている仕事は、おそらくスコットランド作家ウィリアム・シャープ（William Sharp, 1855-1905）がフィオナ・マクラウド（Fiona Macleod）という筆名で執筆した小説作品の翻訳であると思われる。特に、『かなしき女王』と題された作品集は、1925年に第一書房版が出版された後、1989年に沖積舎から、2005年にはちくま文庫版が出版されている。このように何度も版を重ねた松村のマクラウド作品の翻訳であるが、この作品を研究するに際して必要な、基本的な情報の確認作業は、これまで充分になされてこなかったように思われる。

本稿の目的は、フィオナ・マクラウド作、松村みね子訳『かなしき女王』を分析、研究するにあたって留意すべき、以下の基本的な事項を確認することにある。1) 松村／片山は、フィオナ・マクラウドが男性作家の筆名であると認識していたこと、2) 『かなしき女王』の翻訳の底本の書誌情報の確認、

3) 松村の訳業の研究においては、カタカナによる人名や地名の表記について扱いに注意を要すること、4) 沖積舎版以降に生じたテキストの欠落、である。

この研究ノートは、特定地域の民話が様々な芸術メディアに取り込まれ、それが世界中に拡散してゆくなかで、いかなる有り様を獲得しているのかを検証する研究プロジェクト「民話の芸術作品への変容とグローバル化：ブリテン諸島の『あざらし女』の民話を中心に」の一部を成すものである（プロジェクトの詳細は謝辞に記載）。フィオナ・マクラウドの作品のなかには、同時代のアイルランド文芸復興運動の影響もあり、スコットランドの民話を下敷きにしたものが多くある。さらに、この作家の作品は日本における最初の翻訳作品出版から80年以上を経過してもなお、作家の本国から遠く離れた国で人気を博しており、本稿執筆者はマクラウドの作品そのものあるいはその翻訳について、今後さらなる検証をすべきと考えている。ただし、マクラウド作品の評価、すなわち松村翻訳の評価は、学問分野においてよりも出版マーケットによる評価が先行した状態にあり、松村の翻訳のテキストに関して、研究上ごく基本的な事柄でさえ、活字にされることなく現在に至ってしまっている。本稿は、今後の日本におけるマクラウド研究あるいは松村研究のための下地作りの一助となることを目指したいと思う。

1. 『かなしき女王』

片山廣子の仕事は、21世紀の初頭の10年、いわゆる「ゼロ年代」に大きく再評価された。従来、片山は、『翡翠』（1916）と『野に住みて』（1954）という二つしか歌集がないため、近代短歌史においてはマイナーな存在とされてきた。2004年、月曜社から、随筆と小説を集めた、800頁を越える書籍でありながらも手に取りやすい造本の『燈火節』が出版され、2006年には全短歌と資料を集めた『野に住みて』が同じく月曜社から出されて、片山廣

子／松村みね子の仕事の輪郭が非常に捉えやすくなった。

月曜社からの集成の出版の順番は、現在の片山／松村の文筆家としての様々な仕事、それぞれに対する評価を端的に表しているといえるかもしれない（たとえそれが編集上の理由であったとしても）。2004年の『燈火節』は、外国文学の翻訳につながるの深い散文が多く含まれた集成であり、巻末に付された装飾史研究家の鶴岡真弓による論考は、歌人としての片山とアイルランド文学翻訳者としての松村を、ほぼ同じだけの紙幅を割いて論じている。なお、「燈火節」とは、聖ブリジットの日に行われるキャンドルマスのことを指す。松村の論のなかには、聖ブリジットの名が登場する作品として、アイルランド文芸復興運動のパトロン、グレゴリー夫人の著作とともに、フィオナ・マクラウドの「浜辺の聖女ブリジット」が挙げられている（14）。そして、この両著作集の出版の間を縫うように、2005年には、松村みね子訳のフィオナ・マクラウド『かなしき女王』が、ちくま文庫より再刊された。この作品が最初に刊行されたのは、1925年に第一書房からであった。続いて1989年に、妖精研究で高名な井村君江の解題がついて、旧仮名づかいのまま復刻再刊された。2005年のちくま文庫版は現代仮名づかいに改められており、実に三度目の刊行である。研究者を除けば、一般に最も知られている松村みね子（あるいは片山廣子）の仕事は、この翻訳であるかもしれない。また、スコットランド文学史においてトップクラスの作家としての評価を得ているとは言い難いシャープに関する論文が、日本では少なくとも二編、書籍に収録されるかたちでゼロ年代に出版されている。21世紀の日本において、論文の書き手、本の編者、そして読者をこの歌人に引き付ける原因の一つとして松村みね子の翻訳があることは、論を俟たない。¹

2. 松村が知っていたフィオナ・マクラウドの「正体」

アイルランド文学翻訳者として確固たる評価を得ている松村みね子の訳業

のなかで、²最もよく知られている翻訳がスコットランドの作家の作品となっているのは、皮肉である。その原因の一端は、フィオナ・マクラウドことウィリアム・シャープが、現実と仮想、双方のペルソナを用いて、アイルランドにおける19世紀末の文芸復興運動に大きく関与したことにある。シャープは、W・B・イエイツら、当時のアイルランド文芸復興運動にかかわった文人たちと、シャープ本人とマクラウドのペルソナを使い分け、文通によって交流した。シャープがマクラウドあることは、シャープの死後まで公に知られることはなかった。アイルランド文芸復興運動 (Irish Literary Revival もしくは literary revival) は、18世紀のロマン主義に根っこをもち、ヨーロッパに広範にわたって展開されたケルト復興運動 (Celtic Revivals) の一局面としてとらえることができる (Deane 13)。英国の支配からの脱却を目指すアイルランドで立ち上がった文芸運動に、同じくイングランドの周縁に位置するスコットランドの「ケルト」の作家として、シャープはマクラウドという仮構の女性のペルソナを利用して、参画していったのである。

明治維新以後、貪欲に西洋の知識、芸術を摂取、消化、血肉化していった日本の文人たちの間では、明治時代末期からすでにイエイツをはじめとするアイルランド文学の受容が始まっていた。大正時代に入ると、雑誌『太陽』や第三次『新思潮』誌上を中心に、菊池寛の翻訳や翻案、芥川龍之介の翻訳や論考が相次いで発表され、文壇はにわかにアイルランド文学ブームの様相を呈する。³松村によるアイルランド文学作品の翻訳は、この時期に機を一にして多数発表されている。ここに大正時代の文人間の交流が大きく影響していることは、堀辰雄『聖家族』のモデルとなった松村 (／片山) と芥川の親交を挙げるまでもなく明白で、鶴岡真弓は「『大正時代に生きる日本人としてアイルランド文学の紹介にかかわっていること』への憧れないし模倣から」、松村のアイルランド文学の翻訳は始まったといえる、としている (772)。ここでシャープとアイルランド文学とのかかわり合いをもう一度考えてみるならば、シャープは英国の支配下にあるアイルランドでの文学の興隆を海を

挟んだ遠方から正体を隠して支援していた作家であって、その中枢で活躍していた作家ではない。松村がそうした人物の作品に触れるようになり、さらにその翻訳に手を染めたという事実は、アイルランドにおける文芸復興運動が、その周縁で活動する作家に至るまで、当時の日本の文壇で注目を浴びていたことを示していると言えよう。

シャープに関しては、松村の訳業に先駆けて、木村毅が『新潮』誌上で1920年に、「個人内に於ける両性の争闘」と題する、女性のペルソナを利用した側面に注目したシャープ論を発表している。この論を、松村が読んでるのは間違いがない。後述する同じ年に雑誌『心の花』に掲載されたシャープ（松村の表記ではシヤアプ）の作品の翻訳「一年の夢」への付記に、木村の論のことが紹介されているからである（34）。松村が、マクラウドは男性、とはっきり認識して翻訳していた事実は、松村のマクラウドの翻訳を研究するうえで留意しておくべきことであろう。

3. 訳書『かなしき女王』の底本

『かなしき女王』の翻訳にあたって松村が使用したテキストは、*The Works of "Fiona Macleod," arranged by Mrs. William Sharp, 8 vols, Uniform Edition (London: William Heinemann, 1910)* の第2巻および第3巻と考えられている。松村みね子のアイルランド文学の訳業を研究するにあたって第一に参照すべきは、『かなしき女王』の沖積舎版（1989年）に付され、ちくま文庫版（2005年）において増補された井村君江の論であるが、翻訳の底本に関しては、どちらにおいても“Unicorn Edition”（沖積舎、295：ちくま文庫、292）と表記されたまま、現在にいたってしまっている。松村の蔵書にあったこのマクラウドの著作集は、現在では日本女子大学図書館に寄贈され、保管されている（井村、沖積舎 294：筑摩書房 292）。オリジナルの1925年出版の第一書房版『かなしき女王』では収録された12の物語

のうち、11の作品が第2巻よりとられているが、残念ながらこの第2巻は、日本女子大学図書館寄贈本のなかでは欠本となっている。⁴

ただし、「約束」と題された“The Birds of Emar”の前半部分の訳は、*The Dominion of Dreams* とのタイトルを持つ第3巻を原典としており、この作品に関しては、松村本人が参照した書籍そのものを、まだ実際に手に取ることが可能である。「約束」は、もともとは1921年『心の花』1月号に「一年の夢」として発表され、『かなしき女王』に収めるにあたっては、かなり稿が改められている。沖積舎版では、「約束」の最後に『三羽の鳥』の一節(182)とあるだけだが、「一年の夢」では、松村自身の手による付記に、この作品が*The Dominion of Dreams* の“The Birds of Emar”の翻訳であることが明記されている(34)。⁵

4. 松村の訳業における固有名詞の表記

『心の花』に収められた「一年の夢」の末尾で、木村毅の論が紹介されたり、訳の底本が紹介されたりしていることは前述したが、そこには、松村自身による訳業における苦勞なども記されている。そこでは、植物の名前と同時に主人公“Keeven”が、原註には“Ciabhan”と発音するとあるが、「ケルトの発音が私に分りませんので」(34)、英語のように読んで「キーヴン」とした、としている。“Ciabhan”という原註を現代の訳者や研究者が参照するならば、「キーアヴァン」といった表記がおそらく選択されるであろう。しかしながら、現代のようにアイルランド語の教則本が日本語で翻訳される時代ならいざ知らず⁶、松村の時代には、アイルランドにおける地名やゲール語の意味や発音について、教えを請えるあてはほとんどなかった。『愛蘭戯曲集』を出版した時には、アイルランドの北部の地方全体を指す“Ulster”の発音がわからない、と松村は記している(あとがき, 6)。現代においては、旅行ガイドブックも含めて、アイルランドに関わる事柄について筆を執る者で、北アイ

ルランドを含むその地域を「アルスター」と記すことにためらいを感じる者は少なからう。このように、松村の訳業を検証する場合、英語もしくはゲール語固有名詞のカタカナ表記に関しては、少なからずその正確性および誤謬性を裏付けながら研究を進める必要がある。

ただし、松村による固有名詞の「我流」の発音表記が、作品に原典とは異なった「味」や「深み」を生み出す局面もある。例えば、『かなしき女王』に収められた「漁師」（原題は“The Fisher of Men”）には、ゲール語でイエス・キリストを意味する“Iosa”という語が出てくる（本文における書き方で、“Jesus”という意味であることは推測がつく）。⁷松村はこの語をカタカナで表記するのは最初からあきらめて、“Jesus”と言い換えられる前から、「ヤソ」という訳語をつけている。発音がわからないゆえの、こうした松村の工夫は、ある種の創作の域にまで達しているといえるかもしれない。

5. 「海豹」：定本からの翻訳作品の選択と並べ替え、 およびテキスト欠落の問題

『かなしき女王』に収められた物語のほとんどは、前述のように Uniform 版の著作集の第 2 巻から取られている。底本には、二つの Prologue を除くと 21 編の物語が収められており、そのうち 11 編、すなわちおよそ半分が訳出されている。この第 2 巻は、*The Sin-Eater* と *The Washer of the Ford* という 2 冊の作品集を合本したものであり、前半部分に相当する *The Sin-Eater* から訳出されているのは“The Harping of Cravetheen”のみであるので（松村の訳のタイトルは「琴」）、ほとんどが *The Washer of the Ford* からの訳出ということになる。⁸

このようにほとんどの作品が一冊の短編集から訳出されているにもかかわらず、『かなしき女王』の作品の並びに原典に準拠しようという意思がまるで感じられないことは、特筆してよい。作品と作品の間で関係性や連続性が

成立しているものでさえ、間に他の作品を挟んで配置されている。特に、最初の短編「海豹」と五番目に収録された「魚と蠅の祝日」は、三作品で一組として編まれた“Three Marvel of Hy”のうちの二編であり、しかも、三番目の作品である「海豹」（原題は“The Moon-Child”）が前で、二番目の作品にあたる「魚と蠅の祝日」（原題は“The Sabbath of the Fishes and the Flies”）が後にまわされている。三部作の最初の話である“The Festival of the Birds”は、訳出すらされていない。このあたりは、短歌作家、すなわち詩人としての片山廣子の面目躍如と言える部分かもしれない。作品同士の中身の関係性やプロットの順番ではなく、作品内のイメージをどう配列するかを作品の選択と配列の基準の筆頭とするならば、このような訳出の仕方と並びの短編集が生まれて不思議はない。また、このように物語のつながりを無視した短編集が長年にわたって読者の支持を得て版を重ねてきたことは、すでに見たとおりである。

大正時代に活躍した松村の訳業が後世に伝わるにあたっては、1980～90年代に日本でケルト・ブームが起こったときに、松村の作品のいくつかが復刻されたことが大きな役割を果たした。なかでも沖積舎版の『かなしき女王』は、旧仮名づかいのうえに漢字を旧字体のまま用いており、格調高い仕上がりとなっていた。ところが非常に残念なことに、この版の最初に収められた作品の「海豹」には、大正時代に出版された第一書房版から再版されるにあたって、始まってすぐのところでテキストの大きな欠落が生じてしまっている。2005年のちくま文庫版も、この欠落を補うことなく再版された。松村のマクラウドの作品の翻訳には、「剣のうた」（原題“The Song of the Sword”）のように意図的に作品の冒頭を一部省略したものがあるが、こちらのほうは、明らかに編集上の手違いから生じたであろう欠落である。現在、第一書房版は入手が困難であるため、研究の際などには沖積舎版を参照する研究者が多いと思われるが、この点に関しては注意が必要である。

「海豹」はもともと、短歌誌『心の花』の第28巻12号に、1924年に出版

された。それが第一書房版『かなしき女王』に収められて出版されたのが、翌 1925 年である。もともと三部作の最後の作品であるわけなのだが、登場人物に余計な説明を補うことなく訳者は筆を進める。アイオーナで、聖コロンバと後に称されるコラムは、魂のない子供を人間の女に産ませたあざらし男、「黒きアングウス」(“Black Angus,” 現代ならアングスと表記されるであろう)⁹を十字架にかけたことで、罪の意識に苛まれている。

作品の冒頭、コラムは聖「ムルタック」(“Murtagh,” ムルタグ)の葬られている場所を祝福した後、修道士たちに僧房(『心の花』掲載時には「洞窟」)に入れと促し、自らは海へと下ってゆき、浜辺で神と邂逅する。コラムは、ムルタックの亡骸の横へと導かれる。すると死者の傍らに、白い光が立ち上がる。

沖積舎版以降で欠落してしまっているのは、上記のうち、コラムが海に下り、白い光に出会うまでの過程である。『心の花』掲載分では 11 頁下段 1 行目から 12 頁上段末尾から 4 行目まで、第一書房版では 12 頁 2 行目から 13 頁最終行まで、Uniform 版の原文では 293 頁 3 行目から 294 頁 14 行目にあたる。沖積舎版とちくま文庫版では、僧たちに僧房に入れと促した後、コラムはいきなり白い光と話し始めている。第一書房版から沖積舎版へ移行した際に、12 から 13 頁のほぼ二頁分が、すっぱりと抜け落ちたのであろう。作品が始まったばかりの非常に長い欠落であり、大きな^{かし}瑕疵であるといえる。ただ、にもかかわらず、まるで未完でありながら名作の誉れ高い詩歌のように、この翻訳が高い評価を沖積舎版出版以降も受け続けているのは、すでに述べたとおりである。作品の出だしにある編集過程において生じたこの大きな欠落は、そうした状況にありながらも作品を読者に「読ませて」しまう、松村の翻訳の文体の特質を端的に示しているのかもしれない。

結び

本稿では、松村みね子翻訳のフィオナ・マクラウド作『かなしき女王』を研究するにあたって、その前提として念頭に置くべき事項を整理してみた。松村は、マクラウドが男性作家によって仮想されたペルソナであるということを理解しており、自分が固有名詞を現地での発音に則してカタカナ表記していないことを自覚していた。翻訳の定本は1910年出版のUniform版第2巻および3巻であり、松村が実際に翻訳に使用したと思われる書籍のうち、第3巻はまだ手に取ることができる。第一書房版から沖積舎版が組まれるにあたって、最初の物語「海豹」にテキスト上、大きな欠落が生じ、ちくま文庫版でもその部分は補われていない。

以上、松村のテキストにまつわる諸問題をまとめてみてあらためて思うのが、以上のようなハンディをものともしない、松村の翻訳テキストそのものが持つ言葉の力、読者を引き付ける力である。この類まれなる翻訳家歌人がより評価され、研究が発展してゆくことを切に願う。ただ、本稿で検証してきた松村の作品が「翻訳」であるからには、日本で長きにわたって人気を博すような評価を受けた理由の一端を、オリジナルの作品にまったく求めないわけにもいかないであろう。今後、謝辞に挙げた研究プロジェクトを推進してゆくにあたって、マクラウドと松村（あるいはシャープと片山）双方に対する研究の深化を目指すものである。

謝辞

本研究は、平成21年度科学研究費補助金（基盤研究（C））課題番号21520295「民話の芸術作品への変容とグローバル化：ブリテン諸島の「あざらし女」の民話を中心に」の助成を受けたものである。

注

1. 有元、松井を見よ。このようにスコットランドの作家として日本で大きなプレ

- ゼンスを誇るシャープだが、Douglas Dunn が編集し、「ゼロ年代」の2001年と2008年に二度再版されたスコットランド作家短編集にその名がないあたりに、この作家の扱いの彼我の差が感じられる。Dunn を見よ。
2. 例えば、井村君江は「アイルランド文学翻訳家松村みね子」の名は、「文学史上で不動のものに」なった（沖積舎版278：ちくま文庫版280）とし、市原勇は、アイルランド文学の訳業で片山廣子は、「この分野に不滅の金字塔を打ち立てた」（216）としている。
 3. ここで、大正文壇で起こったアイルランド文学ブームについて包括的に論じることは、この小論の手に余る。この点に関しては、後発帝国主義としての日本と、植民地状態にあった西洋の島アイルランドとの関係性に着目した、鶴岡の論は示唆に富む（鶴岡767-796）。ただし、大正時代のアイルランド文学ブームのなかで菊池寛という人物が「個」としてはどのようにそのブームに貢献したのか、また菊池自身の国家観、アイルランド観がどのようなものであったのか、などの諸点については、今後大いに研究の余地がある。
 4. ちくま文庫版には、1921年玄文社出版の『愛蘭戯曲集』から戯曲「ウスナの家」が、現代仮名づかいに改められて収録されている。
 5. こうした松村の翻訳の変遷を追跡するにあたっては、藤田福夫の研究論文を基にした、井村君江の『かなしき女王』解説に併載されている松村の翻訳作品発表の年譜が、大きな助けとなる（沖積舎307-314：筑摩書房305-311）。
 6. オシールを見よ。
 7. Iosa は、I の上に長音記号が入り、「イーサ」に近い発音となる。
 8. この著作集に付せられた、編者であるシャープ夫人の説明によると、著作集の形でまとめるにあたって、作品の内容などを鑑みてオリジナルの出版からかなり作品の順番が変更させられている。Sharp を見よ。
 9. 前述の松村の固有名詞表記の特性についてここで考えてみるならば、“Black Angus”が「黒いアングス」ではなく「黒きアングウス」と表記されることにより、スコットランドの荒削りの民話をベースにした物語に、ロマンス語圏の文学の雰囲気や漂わせる効果が生み出されている。

引用・参考文献

- Deane, Seamus. *Celtic Revivals: Essays in Modern Irish Literature 1880-1980*. London: Faber and Faber, 1985.
- Dunn, Douglas ed. *The Oxford Book of Scottish Short Stories*. Oxford: Oxford UP, 1995.

Macleod, Fiona. *The Dominion of Dreams and Under the Dark Star. The Works of "Fiona Macleod."* Vol. 3. Uniform Ed. Arr. Elizabeth A. Sharp. London: Heinemann, 1910.

—, *The Sin-Eater, the Washer of the Ford and Other Legendary Moralities. The Works of "Fiona Macleod."* Vol. 2. Uniform Ed. Arr. Elizabeth A. Sharp. London: Heinemann, 1910.

Sharp, Elizabeth A. "Bibliographical Note." Macleod, *The Sin-Eater*, 448-9.

有元志保「ウィリアム・シャープによる『フィオナ・マクラウド』のペルソナ構築」、『スコットランドの歴史と文化』、日本カレドニア学会編、東京：明石書店、2008。515-534。

市川勇『アイルランドの文学』、東京：成美堂、1987。

井村君江、解説、マクラウド、1989。275-306。

—、「解題：アイルランド翻訳家松村みね子」、マクラウド、2005。279-304。

木村毅「個人内に於ける両性の争闘」、『新潮』33.6 (1920) : 49-55。

マクラウド、フィオナ『かなしき女王：ケルト幻想作品集』、松村みね子訳、東京：沖積舎、1989。

—、東京：筑摩書房、2005。

マクラウド、フィオナ『かなしき女王：フィオナ・マクラウド短篇集』、松村みね子訳、東京：第一書房、1925。

マクラウド、フィオナ「海豹」、『心の花』28.12 (Dec. 1924) : 11-16。

松井優子「スコットランドと一九世紀末ケルト復興運動：『フィオナ・マクラウド』ことウィリアム・シャープの場合」、『ケルト復興』、中央大学人文科学研究所編、東京：中央大学出版部、2001。473-505。

松村みね子、あとがき、『愛蘭戯曲集』第1巻、東京：玄文社、1921、1-8頁（本文全431頁）。

—、付記、シヤアブ、34。

オシール、ミホール『アイルランド語文法—コシュ・アーリゲ方言』、京都アイルランド語研究会編訳、梨本邦直責任編集、東京：研究社、2008。

シヤアブ、ウィリアム「一年の夢」、『心の花』25.1 (Jan. 1921) : 28-34。

鶴岡真弓「解説：ひるがえる二色 廣子とみね子」、『燈火節：随筆+小説集』、片山廣子／松村みね子著、大西香織編、東京：月曜社、2004。739-802。